

七 次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

(注1) むかし難波の三位入道殿、人に、鞠を教へ給ひしを承りしに、
(蹴鞠を教えなされたのを側でうかがったところ)
 「手持ちは如何程も開きたるがよき」と教へられき。その次の日、又あ
(手の構え方はどれだけでも)

らぬ人にあひて、「鞠の手持ちやう、如何程もすわりたるよき」と
(閉じているのがよい)

仰せられき。是はその人の氣に対して教へかへられ侍るにや。後日に
(おっしゃった) (変えなされたのでしやうか)

尋ね申し侍りしかば、「その事侍り。さきの人は手がすわりたりしほど
(尋ね申しましたところ)

に、拵たるが本にてあると教へ、のちの人は手の拵りたれば、すわ
(基本である)

りたるが本にてあると申せしなり」。仏の衆生の氣に対して万の法を説
(注2)

き給へるも、みなかくのごとし。
(このようである)

『筑波問答』による。

(注1) 難波の三位入道殿蹴鞠の名人。

(注2) 衆生この世のあらゆる生き物。

- (1) 文章中の 教へ給ひし を現代仮名づかいに改め、全てひらがなで
 書きなさい。

- (2) 文章中の あらぬ人 と同じ人物を指す別の表現を、文章中から四字で抜き出して書きなさい。

- (3) 文章中の 氣 の文脈上の意味を表すものとして、最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 才気 イ 気骨 ウ 活気 エ 氣質

- (4) 文章中の その事侍り について、難波の三位入道はなぜこのようなことを言ったのか。その理由として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 何気ない自分の発言の矛盾点を指摘されて困惑したから。
 イ 筆者の発言が自分の教え方の意図に沿うものだったから。
 ウ 外的な質問であつても誠実に対応したいと思つたから。
 エ 理解してもらつたためには丁寧な説明が不可欠だったから。

- (5) 次の文章は、中学生の久保さんが授業でこの文章を読み、みなかくのごとし に共感して記したものです。空欄に入る言葉を書きなさい。ただし、I はこの文章の内容に沿つて十字以内で、II はそれによつて得られる効果を十五字以上、二十字以内で書くこと。

この話のテーマは「教え方」ですが、ここで述べられていることは「教え方」に限らず、人と接するさまざまな場面で応用できるものだと思います。たとえば自分の意見を相手に伝える時も、相手に応じて I ことで、 II のではないかと考えました。